

天 界

第百六號

(第十卷)

昭和五年一月

アンリ・アンドワイエ教授

佛國パリのソルボンヌ大學教授 H. アンドワイエ教授の逝いたのは既報の如く(天界102號477頁) 6月12日であつた。その葬儀のあつた14日の日にパリ學士院の長老 E. ピカール氏が大體次の如き弔辭をよんだ。

『H. アンドワイエ氏の友人を代表して突然長逝した彼に最後の言葉を捧げる次第であります。氏は非常な注意をもつて幸福にも氏に與へられた確固たる精神を胸に秘してゐました。自分自身を打忘れて、氏は細心な注意によつて、與へられた機能を完全にし、まかされた仕事をよくやることをのみ考へておられました。氏よりも謙讓な學者は希であり、又科學は根本的に集動的性質をもつており、従つてその殿堂をきづくには名も知れずにくづもれた小石の必要なことを氏よりも固く信じてゐた學者は少ないでせう。

『月の理論は多くの天文學者をなやませました。アンドワイエ氏は、ドロネイ氏の有名な方法の訂正にその學識生涯の大部分をさゝけました。——その仕事は非常に長年月を要したものでやつと昨年(1928年)に終了しました。

『月の運動の不等(inequality)を、よし解析的表式に表はす事が出来ても、それがすぐ數字計算に役立つものでなければならぬのに、ドロネイ氏の法式は不幸にも數字計算に適しないもので、その展開は長くて極めて收斂が悪くありました。

『この有名な天文學者の方法をこつて、アンドワイエ氏は、多くが不精確であつた七次以上の項を訂正し、更に月や太陽に關する重要な影響を考へに入れて、この吾が衛星の運動の不等を精確にあらはした表式を與へました。

それは非常な仕事で、勞多き計算に費された此の勞力の前には尊敬の念を禁じえません。

『アンドワイエ氏は常に、數字計算に對しての趣味、否むしろ一種の熱情をもつてゐました。氏は色々の三角函數表には誤があるので之等を訂正し、もつと大きな完全な物にせねばならないと考へ、實際それを自分一人で企て、數年の間に三角函數の對數及眞數を含む新しい表を完成しました。

『之こそは氏に大きな榮譽を與へる眞の記念碑であります。氏は數學の高尚な知識があり、廣くも知つてゐましたが、そのために數字計算を忽にする云ふことは一度もありませんでした。氏の持論は、理論天文學者は數學の廣い知識と同時に、勞力の多い計算に對してもすぐれた能力をもつてゐなければならない云ふことでした。この見地から氏は天體力學の目的——彼によればその目的は理論と觀測とを比較すること、從つて法式を直に數字計算にうつすことでした。——を見失なひませんでした。然しそれだから云つて純粹の理論をさけすんだ云ふ事はなかつたばかりでなく、すべての立派な數學者と同じやうに手極よくやる事に對しては尊敬さへももつてゐました。

『その多くの論文の中で、氏は氏以前の學者の著述に重要な補正を加へました。然し屢々愛すべき亂暴さ——親しい人のみが知つてゐる——をもつて自分の考へを發表しました。即ち新しい若干の研究を前にして、ライブニッツの讞辭の中でフォントネル氏と共に、物を發見する方法云ふものは、多くの場合に於て發見された物自身より優る云ふことを述べて憚りませんでした。

『アンドワイエ氏は佛國に於ては古い天體力學に於ける第一人者であり、經度局に於ても、多くの人々に知られてゐる通り權威をもつて佛曆の勞力の多い計算を監督し、屢々佛曆に重要な訂正を加へました。

ラプラスの天體力學は氏の愛讀したもので、すぐれた著述である小冊子の中で、この大數學者の著述の忌憚なき批評を試みてゐます。然しこの中で短い或る一章は、何だか物足りないものであります。それは太陽系の成生に關するものであつて、このやうな問題は絶えず數學的精確さを望んで

ゐた氏にはあまりに空疎なものに見えたに相違ありません。

アンドワイエ氏は科學の研究と同じ程度に、教育にも興味をもつてゐました。氏は比肩すべき者のない程うまい先生でした。大學で天文學を規則通り教へた外に、毎年天體力學の一部について講義をしました。長年親しんだ法式を順序よく展開して行くのは大きな喜びでした。生命を奪つた病の最初の徴候のあつた十日前の日に、氏がソルボンヌへ講義をしに行かうとしたことをきうして今思ひだせないことがあるか？氏は家につれかへされましたが、そのまゝ遂に逝いて了ひました。

『1881年に、先づ師範學校に入つたアンドワイエ氏は直に先生達に認められ、今日多くの吾々の學生達が最初に解析函數の理論の基礎を作る本である“エルミット”の著述の訂正をまかされました。

『そこを出てからトゥルーズの天文臺に十年をすごしましたが、その間理科大學で講義もしました。パリにかへつてからは、色々な教育をし、大學入學の準備をもまかされました。責任感の強い人で、自身の個人的な研究は云ふ迄もなく、聽講者の筆記の訂正にも同様の注意を拂ひました。

ソルボンヌで天文學教授の位置を得た時、氏の喜びは大きくありました。その位置をえてからは、氏の生活は、教育と研究と家庭の仕事に過ぎませんでした。

『1915年、戰爭で一人の子息を失つたことは、非常な打撃を氏に與へました。しかし、陸軍地圖局に働くことによつて僅かに自分を慰めました。

『個人的な野心はもちませんでした。アンドワイエ氏は、パリ天文臺の臺長をまかされた時には、フランスの天文學に若干の貢獻が出来るものご考へてゐました。然し、パリ天文臺とムードン天文臺とが合併したので、氏の計畫をかへなければならなくなりました。それがために氏は意に充たないものがあつたことは親近者のみがよく知つてゐることです。

『H. アンドワイエ氏の生涯はこのやうでありました。彼は友人や弟子に立派な性質、すぐれた品性のよい見本を與へてくれました。學士院の人々によつてなされた、科學と宗教的情操に關しての研究の中で、この吾々の友は次の言葉で文章の結びにしてゐます。

「學者達——即ち學術に全生命を投けうつてゐる人——は必ずいつの日か、絶えず追求してゐる眞理を知りつくすこゝによつて報ひられるものであることを自分は、はつきりご望み且つ信じて行きたいものであります」

『この言葉によつてアンドワイエ夫人並に子息の苦痛が幾分にてても軟らがんことを望みます。こゝに家族の人々に謹んで哀悼の意を表する次第であります。』

因に氏は1862年十月パリに生れた。ポアンカレ氏の後繼者としてソルボンヌで天體力學の講義をし、かたはら經度局に入つて天文曆を編纂した。行年68歳である。

F. ボケー氏 逝く

近着の *Astronomie* 誌は佛蘭西の有名な天文學者ボケー氏の死を報じてゐる。アンドワイエ教授の死についで昨年七月十七日に、氏は吾々の世界からきえて了つた。當時あつた天文學校も譯すべき學校に入つて、そこを出るまゝ直に、パリ天文臺に入つた。彼の研究は極めて多方面であつたが就中子午線觀測並に天體力學では一家をなしてゐた。攝動函數を八次迄展開して學位をえたが子午線觀測の方面では *Les observations méridiennes* なる著述を残してゐる。天文學の歴史にも詳しく、その方面の著には *Histoire générale de l'Astronomie* がある。彼の死は寂びれ行く佛蘭西の天文學界に悲しむべき事でなくて何であらう。

彼の遺稿「天文學漫談」が「天界」誌上に譯される機會のあることを望んでゐる。

『星』 生 る

こん度、會員有志の思ひ付きで、『星』といふ名の新しい天文雑誌を作ることにした。之れは先日の同好會總會協議會の模様に刺激されて生れたものであつて、天文趣味者にも、天文の専門家にも、同様に好かれる面白い繪入雑誌といふ事を目標としてゐる。御手なみをつつ見て頂きたいため、そして尙ほ一般の會員たちの御批評ご御忠告をご得たいために、當分の間は『天界』の附録として、同封し御送りする、しかし、御望みの方々には特に實費（一部金30錢）を以つて御わけします。（星の同人）